書評

# 吉田武男・中井孝章著
# 『カウンセラーは学校を救えるか
# —「心理主義化する学校」の病理と変革—』

岩　本　親　憲※

スクールカウンセラーあるいはスクールカウンセリング（カウンセリング）に対して向けられる批判はときに的外れであり，一方的な非難で終わっていることがある。さもなければ，過度に抱いた期待と盲信が裏切られたがゆえの反動として偏った批判がなされる。アメリカにおいても同様に，カウンセリングはその発展過程においてしばしば誤解され，また過度に期待され，時に「不当」な非難が向けられた。しかしながら本書はそのような類のものではない。

シュタイナー教育や道徳教育を専門とする吉田武男氏と，子ども論・教育方法論を専門とする中井孝章氏の二人の著者は，具体的な事例や政策および理論的背景を踏まえながらスクールカウンセリング制度が抱える問題点を鋭く指摘し，今後の教育的営みを改善していく手がかりを示している。さらに，本書でとりあげられている議論はしばしば専門的なものであるにも関わらず，この分野の専門でない読者にも読みやすいように工夫されている。もちろん，スクールカウンセリング制度に疑問を持つ人々に限らず，それを支持する研究者にとっても示唆に富むものがあり，今後のスクールカウンセリングをよりよいものにしていくためには看過できない問題が多く指摘されている。

また本書においては，スクールカウンセリング制度の抱える問題点が指摘されるだけでなく，著者自身が告白しているように，不充分ではありながらも，実践的な視点と理論的な視点の両方から改革案が提示されている。批判するだけでなく代替案を具体的に提言し，それに対する反論を受け入れようとしている点で本書は非常に優れている。しかしながら，筆者らのそのような苦労に敬意を表しつつ，本書を読み進めるなかで感じたいくつかの疑問点と評者なりの解釈を，構成と内容をまとめながら以下に論じていきたい。

※筑波大学大学院院生

本書は２部構成となっており，第１部「実際的地平から」を吉田氏が，第２部「理論的地平から」を中井氏が担当している。本書はもともと月刊誌『教職研修』(2001年４月号から2002年３月号）に掲載された12回の連載「教育学の逆襲―スクール・カウンセラーは子どもを救えるか―」をベースとしており，それを加筆・修正し，新たに書き下ろした原稿を加えて構成しなおしたものである。構成は次のようになっている。(節は省略)

プロローグ
第１部　実際的地平から
　序論　　カウンセリングは「こころの病」を治せるか？
　第１章　学校を取り巻く奇妙な風潮
　　―教師への揶揄とスクールカウンセラーへの盲信―
　第２章　支援・援助の偏重の危険性
　第３章　学びの共同体としての学級づくりの復興と教師の力量形成
第２部　理論的地平から
　序論　　「臨床の知」を内破する
　第１章　サイコバブル状況としての社会・学校とスクールカウンセラー
　　―「心理学の現実化」に伴う学校秩序のゆらぎ―
　第２章　「教師―生徒」関係のゆらぎとスクールカウンセラーのスタンス
　第３章　スクールカウンセリングからのエクソダス
　　―学校変革への理論的定位―
エピローグ

本書によれば，私たちは，日常の思考や関心が否応なしに「こころ」へと焦点化される状況，すなわち「サイコバブル状況」に置かれているという。本書は，このように「こころ」を語ることなくして教育を語ることが出来なくなっている「サイコバブル状況」において，スクールカウンセラー（スクールカウンセリング制度）を現在の形式のまま導入することは，学校をますます「心理主義化」させ，教師の専門性（指導性）と権威を失わせる危険があると警鐘を鳴らし，スクールカウンセラーへの過度の期待と盲信を一刻も早く解消することが，日本における「教育問題の根本的な解決に向けての健全な教育を教師や親に取り戻す第一歩とな

る」と主張している。

まず第1部においては，スクールカウンセリングの問題点が実践的地平から解明され，それらの問題の具体的な解決策が提言されている。第1章および第2章においては以下のような問題が指摘される。すなわち，マスメディア等の影響のもとに構築されたスクールカウンセリングの擁護論によって，学校や教師の社会的権威が失われていってしまうという問題。社会的責任の問題が問われないまま，スクールカウンセラーに過剰な期待がよせられていることの問題。個人主義とプラグマティズムを基盤とするアメリカにおいて発展してきたカウンセリング理論を，日本文化にそのまま移植することの問題等である。これらの問題点は，具体的な事例とデータがとりあげられながら論じられており，非常に説得力のあるものとなっている。

第3章においては，これらの問題の暫定的な解決策として，以下の4つの提言がなされている。すなわち①真の権威関係に基づいた，学習と生活が統合される学級づくり，②補助教員やスクールソーシャルワーカーの導入および医師・事務職員・用務員の雇用と増員による教師のサポート，③教員養成システムの改革，④教員の研修システムおよび雇用システムの改革である。

最後に，吉田氏は次のような注目すべきことを主張している。「社会的につながった人間同士の関係性をズタズタに断ち切り，個人内の心理的経験あるいは感情的気分を偏重するようなアプローチへの固守がただただ続けられる限り，現実の教育状況は一向に改善されないどころか，日本の共同体的なよき学校・学級文化（協働的な教育組織の運営も含めて）も根こそぎ破壊されかねない…（中略）…治療（cure）ではなく世話（care）という意味のケアの作用，および自然的な治癒の作用を醸成するような新しいかたちの学級づくりが，心身とも健全な教師によって寄り添った日常生活とのつながりのなかで模索されるべきで」（p. 164）あると。

吉田氏が主張しているように，教師はスクールカウンセラーに指導されるべき二流の専門家ではなく，スクールカウンセラー以上に教育に精通した専門家であるとの自負を失うべきではないし，またそういえるだけの専門性を保持する努力が必要である。そのうえで，教師，教育学者，心理学者，ソーシャルワーカー，弁護士，医者，警察などのあらゆる専門家が連携しながら権限と責任を引き受けていく必要がある。近年このような連携システムを構築することが強く求められ

てきているが，そのためにもスクールカウンセラーは自らの専門性と社会的責任（倫理）をより一層明確に規定していかなければならない。

次に第2部においては，「『臨床の知の呪縛』を解き放ち，『臨床の知』そのものを内破していく」ことによって，「スクールカウンセリングおよびスクールカウンセラー問題」が検討，克服されることがめざされる。そのために，まず序論において，精神分析学や臨床心理学が社会に受け入れられる契機のひとつとなった前提である「臨床の知」が批判的検討に付される。「臨床の知」は，無批判に容認され，「反科学性または非科学性を正当化するための免罪符であってはならない」(p. 177) と中井氏は主張する。中井氏の主張は説得的であり，自然科学のモデルに基づく理論と同じくらい説得力のあるものとして，臨床的な実践を理論化することの難しさを，あらためて痛感させてくれる。

第1章においては，バーガー（P. L. Berger）とルックマン（T. Luckmann）の社会学理論に基づきながら，スクールカウンセラーを要請する社会・学校のサイコバブル状況（心理学の現実化の問題）が次のように分析されている。すなわち，現実は主観的世界と客観的世界の間で循環的に生じる弁証法的関係のもとで「社会的に構成される」がゆえに，そもそも「外から取り入れられたもの」であったはずの「無意識」，「コンプレックス」，「アダルトチルドレン（AC）」といった心理学用語や概念は「知らず知らずわれわれの自己認知の一部」(p. 194) となり，その言葉を完全に「内面化＝同一化」してしまう。そのようにして，人々は「こころの言葉」なしには何事も語りえないし，理解し得ない「セラピー的語法者」となっていくのであると。

中井氏は，カウンセラーが「自らの信憑する価値相対主義的な道徳教育（「価値明確化」）を通じて，学校現場に意味の虚無状態（ニヒリズム）を作り出しながら，一方でそのニヒリズムと闘うと称して，カウンセリングをもって彼らのこころをケアし，救済するといったマッチポンプ状況を作り出している」(p. 186) と指摘し，心理学的にそして社会的に構成された「こころの言葉」によって「こころの問題」が生み出されるという問題状況を提示する。そしてそのような問題状況において機能不全に陥っている学校においては，「特に『教師—生徒』関係および生徒同士の関係（広義の教育関係），総じて学校における関係性が解体の危機に瀕している」(p. 213) とされ，第2章においては教育関係の問題に焦点があてられる。そして第三章において，中井氏は「あらゆる教育問題とは，人間関係の

『あいだ』から生じてくるのであり，従って真正の問題解決は，関係性そのものを改善する以外にあり得ない」(p. 257) と端的にのべ，そういった問題状況を打開する手立てとして，「短期療法」(ブリーフセラピー) と「ナラティブセラピー」をとりあげている。

以上を踏まえたうえで，次の二つの疑問点に関して簡単に論じてみたい。すなわち，①カウンセリングは教育関係を解体するものなのか，②カウンセラーはクライエントの現実問題それ自体を根本的に解決しようとしないのか，という疑問点である。

まず①に関して，中井氏は，教育という営みが「本来『権威—従属』という非対称的な『教師—生徒』関係によってしか成立しない得ない」(p. 224) と述べ，スクールカウンセラーの学校への本格的な導入が，知識の教授と生活規範の指導の「型」を根こそぎにし，従来の教育関係を解体させるという。たしかに，この主張は充分に理解できるものではあるのだが，はたしてカウンセラー (カウンセリング) はなんでもよしとする放任主義を蔓延させる元凶であろうか。そしてそれは，教育関係を解体するものなのであろうか。

「ロジャーズおよびその学派は，クライエントの語る言葉を受容・傾聴しつつ，彼らのこころを共感的に理解することを重視するため，彼らに対して積極的に介入したり指示したりすることはしない。したがってこの学派では，生徒の抵抗感を素直に受容すること，感情の明確化を図ることの二つをカウンセリングの主要な技法としている。」(p. 228) という記述からすると，そこにはカウンセリングに対する大きな誤解が横たわっているように評者には思われる。中井氏はカウンセリングの理論的な理解というよりも現場でそのように理解されている状況を説明しているのかもしれないが，このような捉え方ではカウンセリングを一側面からしか捉えられないのではないだろうか。

そもそもロジャーズが主張したカウンセリング理論は，中井氏が述べているようなものではないと評者は理解している。むしろカウンセリングとは，クライエントが成長しようとする内在的な力を解放するためにこそ，受容し共感的に理解することを通して教育的関係 (役割関係) を結ぼうとするものである。そこで重要なことは「指示しないこと」や「指導しないこと」ではなく，たとえそのような介入がなされたとしても，クライエントが自らの選択する責任をカウンセラーにゆだねることがないように，徐々に援助していくプロセスである。それゆえに，

カウンセラーは自らの価値を明らかにするよう努め，クライエントに潜在的に価値を植え付けるマインドコントロール（操作主義）に陥る危険をできるだけ避けなければならないのである。

カウンセリングにおける価値的側面（倫理・文化・教育に関わる問題）については，アメリカにおいては歴史的に議論がなされてきている。しかし吉田氏が第1部第2章（pp. 89－102）において指摘しているように，日本においてはこの分野に関する研究は皆無に等しい。それゆえに，本書が危惧していることの意味は充分に理解できる。このような批判に応えるかたちで，今後この点に関する研究がなされなければならない。

次に②に関しては，吉田氏が「エピローグ」において述べている以下の箇所に，吉田氏と中井氏の二人の筆者に共通する問題意識が集約されている。そこで議論されている論点は，今後のスクールカウンセリング制度の改革にとって重要である。すなわち，「教育の諸問題は，心理レベルだけでなく，生物的・生態的レベル，さらにはその背後にある社会的・経済的・政治的な状況の複雑なからみあいのなかで生じているのにもかかわらず，あたかも心理的な視点やアプローチだけで理解・解決できるのではないか，という誤解が横たわっている」（p. 296）という論点である。「こころの専門家」と呼ばれる専門家たちは，「こころの問題を解決しようとするのであって，決して子どものかかえている現実問題それ自体を根本的に解決しようとするわけではない」（p. 80）のであり，それがたとえ「善意に基づいた好意であっても，場合によっては結果的に，こころ以外の問題（たとえば，身体の問題，日常生活の問題，家庭の問題，親の問題，学校の問題，教師の問題，地域の問題，社会の問題など）の所在を隠蔽し，根本的な解決への取り組みを妨害することにつながりかねない」（p. 80）と吉田氏は述べている。しかしながら次のような研究も存在している。例えば，個人の内面に対してアプローチしていくと同時に，個人をとり巻くコミュニティーシステムにも働きかけながらクライエントを援助するというソーシャルサポートの視点をカウンセリングに取り入れることが提言されている研究（宮崎隆穂・小玉正博「わが国のソーシャルサポート研究とその課題―カウンセリングにおける活用を目指して―」，カウンセリング研究，33，pp. 95－102，2002年）や，教師・保護者・カウンセラー及び様々な分野の専門家によるチームによる「心理教育的援助サービス」の体系化を目指した石隈の研究（石隈利紀『学校心理学』，誠信書房，2003年）である。現

在徐々にこの分野の研究もすすめられてきており，カウンセリングは吉田氏が危惧している状況に完全に飲み込まれているわけではない。

カウンセリングと心理療法の概念をできる限り区別し，カウンセリングを治療的機能・過程というよりも，むしろ教育的機能・過程として積極的に評価したい評者にとって，本書において捉えられているカウンセリング概念は幾分狭く，カウンセリングにおけるすべての側面を正当に評価していないように感じられた。とくに，たとえ「育てる」カウンセリングであっても，「日常の社会や生活を切り離して個人の中での病理・治療モデルに着眼している」という点で，「病院の心理職系のグループ」と「根本において共通していると言わざるを得ない」と本書が批判している点には同意しかねる。というのも，そのような大雑把な捉え方をすれば，カウンセリングに限らず学校教育のシステム自体が「日常の社会や生活」から個人を切り離している，と考えることも可能だからである。また，そこで語られる「日常」という概念自体が，カウンセリング理論においても多様であり得ることが考慮されるべきであろう。カウンセリング理論にはいくつかの異なった哲学的・理論的立場が存在しており，それらに基づきながら，「日常の社会や生活」と不可分に結びついたものとしてスクールカウンセリングのシステムを包括的に構築することは容易ではない。スクールカウンセリングを基礎づける理論と哲学を明らかにすることが，今後の大きな課題となるであろう。

吉田武男・中井孝章著

『カウンセラーは学校を救えるか—「心理主義化する学校」の病理と変革—』

昭和堂刊，2003年，1900円